

第41回日本嚥下医学会 発表

題名；横浜嚥下障害症例検討会通年講座での「とろみ」簡易粘度測定法実習の活用事例

氏名；桑原昌巳^{1,2)}、西山耕一郎^{1,3)}、金井枝美^{1,4)}、木村麻美子^{1,5)}、山本奈緒美^{1,6)}、上野美和^{1,7)}

所属；¹⁾横浜嚥下障害症例検討会、²⁾日清オイリオグループ中央研究所、³⁾西山耳鼻咽喉科医院、

⁴⁾横須賀共済病院リハ科、⁵⁾衣笠病院栄養科、⁶⁾横浜市立脳卒中・神経脊椎センター、

⁷⁾鎌倉リハビリテーション聖テレジア病院

【目的】横浜嚥下障害症例検討会は、地域の多職種に正しい嚥下の知識を普及するために、年6回の通年講座を開催している。地域で使用される「とろみ」は、日本摂食嚥下リハビリテーション学会の「学会分類2013（とろみ）」を共通言語として使用し、臨床現場が提供している「とろみ」の粘度は必要に応じて測定でき、学会分類（とろみ）の3段階に分類できることが、地域連携に望ましいと考える。横浜嚥下症例検討会では、学会分類（とろみ）の基準値のE型粘度計値と相関があり、臨床現場で容易に測定できる簡易粘度測定法を考案し、通年講座の実習で講習を実施している。簡易粘度測定法の臨床での効果を調査した。

【方法】簡易粘度測定法は、テルモ社製「カテーテルチップシリンジ 50ml (SS-50CZ)」の外筒を用い、50mlの目盛まで「とろみ」を入れ、自由流出させて40mlの目盛まで、20mlの目盛まで、0mlの目盛までの、各10ml、30ml、50mlの「とろみ」が流出する時間（秒）を測定する方法で、検量線を求めて時間（秒）からE型粘度計値を推定した。3か所を約10秒で通過した場合には、「濃いトロミ」「中間のとろみ」「薄いとろみ」に該当する。この簡易粘度測定法の講習を受けた参加者が粘度測定を臨床で利用した事例を調査した。

【結果と考察】A老健施設では、自施設の4段階の「とろみ」を計測し、中間のとろみに該当する段階が無いことを確認し、4段階が等間隔で中間の「とろみ」があるように修正した。B老健施設では、入所と通所で異なった容量で基準を設定しており、全部で9種類の「とろみ」を作っていたが、粘度を測定したことで、通所から入所した場合の「とろみ」の連携が明確になった。通年講座での簡易粘度測定法の実習は、地域の施設が学会分類（とろみ）を共通言語として利用することに役立つと考える。